

2 軟組織に生じる非歯原性嚢胞

1 鼻歯槽嚢胞 nasolabial cyst

臨床症状

- 鼻翼基部の歯槽骨上の軟組織内に発生する嚢胞で、かつては、球状突起、外側鼻突起、上顎突起の癒合部の上皮遺残から生じる顔裂性嚢胞とされていた。
- 現在は、鼻涙管原基と関連しているといわれている。
- 20～30歳代に多い。
- 女性にやや多い。
- 鼻翼基部の膨隆を認める。
- 鼻唇溝の消失、鼻前底の膨隆（ゲルベル隆起 Gerber protrusion）を伴う。
- 口腔内では、歯肉唇移行部の膨隆を認める。
- 波動を触知する。
- 漿液性内容物を認める。
- 画像所見では、軟組織内に存在するため骨内に異常を認めない。増大すると骨表面に吸収を認める。
- 造影剤注入の側面エックス線検査では、鼻翼基部に類円形の不透過像を示し、二重造影（造影剤注入 → 吸引 → エア注入）では辺縁平滑な嚢胞性病変を示す。
- CTでは、境界明瞭な嚢胞性病変として認められる（図3-9-a）。

組織学的所見

- 2層構造を示す（図3-9-b）。
- 裏装上皮は杯細胞を有する多列円柱上皮（偽性重層線毛円柱上皮）がほとんどであるが、立方上皮や扁平上皮が混在する。
- 裏装上皮の外側は、線維性結合組織からなる。

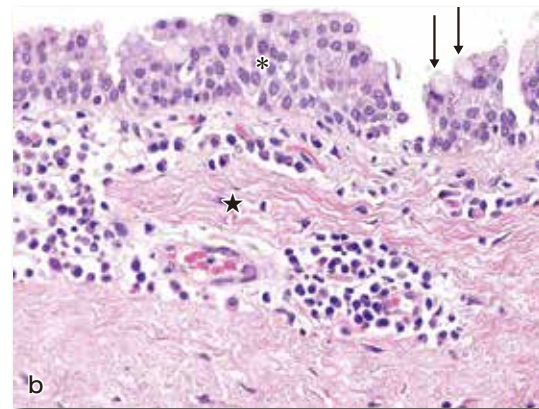


図3-9 鼻歯槽嚢胞

- a: CTでは、鼻翼基部に境界明瞭な類円形の嚢胞性病変を認める。
b: 杯細胞（矢印）を有する多列円柱上皮（*）で裏装され、その直下は線維性結合組織（★）からなる。

2 甲状舌管嚢胞（正中頸嚢胞） thyroglossal duct cyst (median cervical cyst)

臨床症状

- 甲状腺は、胎生3週に舌の不對結節と底總節との間の舌盲孔に発生し、胎生7週までに定位置に移動する。
- 通常、移動経路である甲状舌管は胎生10週までに萎縮、消失するが（p.99, 図6-3参照）、その遺残に由来する嚢胞である。
- 舌盲孔と甲状腺との間に生じる。
- 舌骨下部の正中頸部に多いが、正中でない場合もある。
- 10歳以下が約半数で、30歳以上が30%を占める。
- 性差はない。
- 舌骨下部に生じたものでは、中に漿液性ないし粘液性の内容物を入れ、波動を伴う無痛性腫瘍を認める。
- 舌根部に生じたものでは、嚥下障害を認める。
- CTでは、舌骨近傍の正中に内部均一で、境界明瞭な嚢胞性病変として認める。
- MRIでは、T2強調像で高信号を示す。

組織学的所見

- 2層構造を示す。
- 嚢胞壁に隣接して甲状腺組織が認められる（図3-10-a）。
- 重層扁平上皮ないし線毛円柱上皮で裏装され、その外側は線維性結合組織からなる（図3-10-b）。

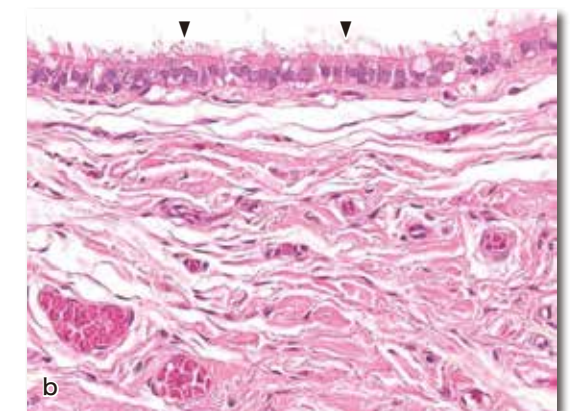
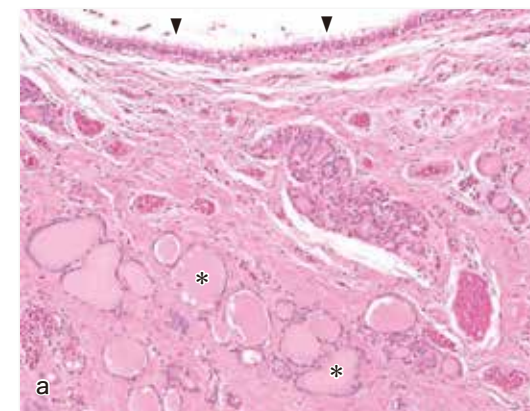


図3-10 甲状舌管嚢胞

- a: 嚢胞壁に隣接して甲状腺組織（*）が認められる。
b: 線毛円柱上皮（矢頭）で裏装され、上皮は線維性結合組織からなる。